

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：33929

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02276

研究課題名(和文) 文献による「名古屋芝居年表 近世編」の作成 - 地方歌舞伎の再評価 -

研究課題名(英文) "Making of a Performing Art chronicle in the Edo period " seen through documents-Reestablishment of Local Kabuki

研究代表者

安田 文吉 (Yasuda, Bunkichi)

東海学園大学・人文学部・教授

研究者番号：80121474

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：歌舞伎は京都で生まれ、三都で発達した都市の演劇であるが、短期間に東北から九州まで伝播した。三都以外で第一の規模を持つ上演地が名古屋であった。名古屋は江戸と上方の中間地あり、尾張藩の城下町という状況から、東西の歌舞伎や人形芝居を招聘上演しながら、在地の一座や役者がこれを吸収、再構成して地方に旅興行し、地芝居の発達に貢献した。この名古屋歌舞伎の研究の基礎資料として、番付などの直接資料、日記や記録類中に散見する芝居記事などを収集して、年表の形で提示した「名古屋芝居年表-近世編」(稿)作成し、東海学園大学図書館のHPで公開することにした。資料の網羅は不可能なので、今後も探究調査は続け、順次追加する。

研究成果の概要(英文)：Kabuki, born in Kyoto, flourished in three major cities and spread from the northeastern part to Kyushu. Nagoya located in between Edo (present Tokyo) and Kamigata, and the castle city of the Owari Tokugawa family was second to the three cities in terms of Kabuki. Inviting eastern and western kabuki groups and Japanese puppet plays (Bunraku), local performers absorbed and reconstructed their skills and know-how, they went to various places, and it helped the development of local plays. Using primary sources like play titles with players' names and secondary sources like diaries and documents referring to plays as Nagoya Kabuki researches, basic sources, we would like to establish a Nagoya performing art chronicle in the modern age with Japanese documents and try to reestablish Local Kabuki. It will be made public through the homepage of Tokai Gakuen University library. The exhaustion is difficult, so we would like to continue to search and investigate to establish our goal.

研究分野：近世芸能

キーワード：名古屋歌舞伎 からくり 地芝居 旅芝居 人形浄瑠璃 歌舞伎年表 番付 地役者

1. 研究開始当初の背景

(1) 歌舞伎は京都で誕生し、三都で発達した都市の演劇であるが、発生間もない時期から、急速に本州から九州まで伝播した。名古屋は上方と江戸の中間に位置し、御三家筆頭の尾張藩城下で、三都に次ぐ都市で、地方第一の歌舞伎興行地であった。しかし、この実態はあまり認知されておらず、研究のための資料収集も十分ではなかった。

(2) 名古屋は、地方ではもっとも早い時期から公許の常設小屋があり、在地の一座や役者の活動もあり、独自の歌舞伎上演の形態が確立されていた。特に、七代藩主徳川宗春の時代には三都の歌舞伎をも凌ぐ勢いで、「芝居王国」とまで称されたが、宗春の失脚とともに芝居興行は全面禁止となった。その後、復興と禁止を繰り返しつつ復活し、文化初年には三都に次ぐ芝居地となり、毎年の上方芝居の地方興行地となった。天保の改革時も、いち早く禁止を乗り越えて復活し、上方役者の移住地となった。こうした名古屋独自の歌舞伎上演のあり方の輪郭は、守屋毅、池山晃、安田徳子の研究によって、明らかにされつつある。

(3) 名古屋の在地の一座や役者は、周辺地方に旅興行し、地芝居の発達に影響を与えたことが、守屋毅氏に拠って指摘されている。しかし、江戸時代における、名古屋の歌舞伎と地芝居の関わりについては、ほとんど明らかになっていない。

2. 研究の目的

(1) 1に述べたような、名古屋歌舞伎研究の現状の中で、歌舞伎史における、地方歌舞伎、中でも名古屋歌舞伎の果たした役割の重要性を明らかにし、その再評価をしたい。

(2) しかし、名古屋歌舞伎の研究は、まず、名古屋歌舞伎史の継続的な展開を把握した上で、それぞれの時期の動向を明らかにし、その意義を分析すべきであるが、注目される時期の動向を部分的に捉えて、分析探究したものばかりで、名古屋歌舞伎を継続的に捉えたものがない。現在、「近代歌舞伎年表名古屋篇」が国立劇場から刊行中で、明治以降の動向については、歌舞伎史の継続的な把握のための作業が進みつつあるが、江戸時代については、この対象外である。

(3) それで、本研究では、江戸時代を対象とした「名古屋芝居史近世編」の編纂を試み、名古屋歌舞伎発祥から幕末までを俯瞰できるようにし、これに基づいて、名古屋歌舞伎を再評価する。

3. 研究の方法

(1) まず、名古屋及びその周辺の歌舞伎史を構築するための基礎資料(番付や評判記などの直接資料)、日記や記録類などに散見する芝居関係資料など、文献資料をできるだけ収集する。本研究代表者及び研究協力者は、本研究開始以前から、こうした文献資料の収集に努

めてきたので、それを更に補う資料を探索し、調査して複写による収集及び購入による収集を行う。

(2) 名古屋歌舞伎は、隣接芸能である人形芝居や雑芸とも絡み合いながら展開した側面があるので、これらに関わる資料も含めて収集する。また、名古屋歌舞伎は、地方歌舞伎のであり、地芝居の発祥、発展に大きな影響があったと思われるので、名古屋周辺の地域の地芝居資料もできるだけ収集する。

(3) これらを整理・分類して、「名古屋芝居年表 近世編」(稿)を作成する。この年表から読み取ることができる、名古屋芝居の実態、歌舞伎史上に果たした役割を明らかにする。

4. 研究成果

(1) 「名古屋芝居年表 近世編」作成の基礎資料として、名古屋芝居を年代記風に綴った、伊勢屋忠兵衛編『尾陽劇場事始』及び京都大学図書館蔵『役者付』(池山晃氏によれば『張府永楽記』零本)、小寺玉晃編『続尾陽劇場始志』『尾張芝居雀』『芝居藪の中』『名古屋勾欄続々誌』『古袖町勾欄記』『勾欄類雑集録』に基づいて、年表に整理し、これに記された上演記事を番付及び役者評判記によって確認、修正、追加した。さらに、『鸚鵡籠中記』『猿猴庵日記(金明録・蓬左見聞雑著)』『見世物雑志』などの日記類、『尾張大根』『金鱗九十九之塵』『雍州府志』『尾陽寛文記』『昔話』『正事記』『紅葉集』『名陽見聞図会』『翁草』『慶長自記』『清正記』『続撰清正記』『月堂見聞集』『ゆめのあと』諸本(『広本遊女濃安都』『三廓細見記』他)、等の地誌・随筆・史書類の記事、また、名古屋瑞龍工芸技術保存振興会蔵「橘町関係文書」等の文書類を参照して、上演記録の確認、修正、追加も行って、「名古屋芝居年表 近世編」(稿)を作成した。名古屋では、歌舞伎も人形芝居も区別せず、同じ小屋で興行しており、共存していたと思われるので、歌舞伎も人形芝居も「芝居」として同一に扱った。

名古屋歌舞伎の上演記録の吟味作業は、すでに池山晃氏の「天保改革後の名古屋歌舞伎」(『近世文芸』50,1989)、『続尾陽劇場始志』等にみる名古屋歌舞伎 - 元文から天明まで - 」(『演劇研究』14,1990)、「名古屋と上方歌舞伎 - 天明後半から文化中期まで - 」(『国語と国文学』67 1,1990)、「江戸の大立者と名古屋 - 文化、文政、天保」(『歌舞伎 研究と批評』5,1990)、「近世名古屋における小芝居」(『歌舞伎 研究と批評』11,1993)等の一連の名古屋歌舞伎研究論考に追うところが大きい。また、名古屋歌舞伎では、「竹田からくり名代」と称して、からくり上演を名目に歌舞伎上演を行うという、名古屋独特の上演形態をとった時期があったので、山田和人『竹田からくりの研究』(おうふう、2017)からからくり上演に関する情報を参照した。

(2) 「名古屋芝居年表 近世編」は、名古屋歌舞伎が地方歌舞伎の最大拠点として、大歌

舞伎を如何に受け止め、地方都市の文化として定着させ、さらに周辺地域に伝播し、地芝居の発達を助けたかを読み取るための基礎資料であるから、名古屋周辺地域の地方芝居、地芝居の動向も、年表に納めた。その範囲は、尾張藩領内とその周辺地域である尾張・美濃・南信、街道を介して交渉が多かった三河・伊勢・西遠をほぼ対象とした。地方都市の芝居興行、地方芝居上演では、番付が作成されることは稀であったので、資料が非常に少ない。伊勢については皇學館大学神道博物館蔵千束屋旧蔵『伊勢歌舞伎浄瑠璃年代記』と吉田映二『新補伊勢歌舞伎年代記』があり、伊勢古市と中之地蔵、津愛宕芝居等では、番付も出されているので、上演記録の作成は名古屋と同様な方法で行った。岐阜、岡崎、豊橋には少しは番付が残っているが、その他は地誌・県史・郡史・市町村史等に記された記録を拾った。地芝居は、下条村の様に、特別な芝居上演の時には、版木を起こして番付を刷って配った村もあったが、それは全く希有な事例であって、刷り物などはないのが普通である。ただ、上演台本が保存会や旧家に残っている場合があり、ここに上演年次が書き込まれて居れば、貴重な上演記録である。地芝居上演は祭の奉納芸として上演されるので、祭礼記録類、町役村役の日記類に記されていることが多いので、地芝居上演記録を拾った。

三河の芝居動向については、鈴木光保氏の「三州吉田芝居番付」(『名古屋大学国語国文学』61,1987)、「尾州熱田芝居考」(『論集近世文学』2,1991)、「岡崎六地藏芝居素描-番付を手がかりに」(『ふるほん西三河』51,1995)を、人形芝居については、加納克己「東海地方を中心とした地操り略年表(享保末まで) 付 歌舞伎・からくり・專業座」(『芸能史研究』199,2012)を参照した。

(3) (1)(2)によって整理できた上演記録を「名古屋芝居年表 近世編」(稿)として、年表形式にまとめると、以下のことが見えてくる。
・名古屋芝居は、女歌舞伎、若衆歌舞伎の時代から、為政者の庇護下に、幕府の規制より緩やかな状況下で始まっていた。その後も幕府と尾張藩の緊張関係が、そのまま芝居への締付と緩和に反映しつつ、名古屋歌舞伎独特の上演形態や興行形態が形成されていった。
・江戸時代中期以降、上方歌舞伎では役者が小屋との年間契約という形態が崩れ、大芝居の役者も巡業に出るようになった。名古屋は伊勢・奈良と共に、その東回りの巡業地として、毎年2~3ヶ月の上方歌舞伎の興行が行われた。また、三都で芝居に対する締付が厳しい時期には、名古屋は上方芝居の代替地となり、役者が流れ込んできて興行した。

・名古屋では、寛文後期(1665~1673)には相模座や和泉屋座などの在地の歌舞伎一座があり、これが周辺地域の町や村に巡業し、地芝居の発生を助成したので、尾張藩領や隣接の美濃・三河などは、全国でも早い時期に地

芝居が始まっていた記録が残っている。その後も在地の役者や一座の活動は活発だったようで、巡業してきた上方歌舞伎の一座に地役者や浄瑠璃方、振付師などが加わった興行も多かった。これによって、おそらく、名古屋での東西歌舞伎の上演は、独自の演出などが加えられていたのではなかろうか。また、上演に参加した在地の役者はそれによって、東西歌舞伎を習得し、地芝居へ東西歌舞伎の情報を持ち運び、地芝居の活動を助成したのである。

(4) 「名古屋芝居年表 近世編」(稿)は東海学園大学 HP で公開する。しかし、未だ未発見・未収集の芝居資料もあるので、今後も常に収集は続け、定期的に「名古屋歌舞伎年表」の修正・追加を行っていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

安田文吉、書評 山田和人著『竹田からくりの研究』、国語と国文学、査読無、巻未定、2018

安田文吉、第7章第三節文化の展開、愛知県史通史編6近代、査読無、単行本、2017、638-644

安田文吉、書評 小野恭靖著『歌謡文学の心と言葉』、国文学研究、査読無、181、2017、129-132、

安田文吉、日本文化と歌舞伎の本質、附けの技、SOUND Art & Technologies、無、83、2015、33-36

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 1 件)

安田文吉・安田徳子、三弥井書店、伝承文学注釈叢書『豊後節系浄瑠璃集』、2018、237

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
東海学園大学図書館 HP
<https://www.tokaigakuen-u.ac.jp/lib/>
「名古屋芝居年表 近世編」(稿)を公開

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安田 文吉 (YASUDA, BUNKICHI)
東海学園大学・人文学部・教授
研究者番号：80121474

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

安田 徳子 (YASUDA, NORIKO)